



# 家庭の同行<sup>どうぎょう</sup>6

ひき出されてゆく生きる力

茂吉(和田重良)

- 穴のあきそうな心を「充たしてくれる」もの
- つないだ手は離さない「信じている」こと
- あそこに帰れば迎えてくれると
- 「あんしんできる」こと

## 生活の基準となる

### 柱を建てろ

#### 帰巢本能

昆虫や鳥や魚などに見られる「元に戻る能力」というのは知れば知るほど面白い興味深い能力です。蜂のハチダンスや、サケの生まれ

れ故郷の川に戻ってくる様子や、伝書鳩が方向を間違えずに帰ってくる能力などそれぞれが特殊なものを持つているようです。

「素数ゼミ」の話なんかもとても面白いですね。ナゼ蟬が素数を知っているんだらうと不思議です。

人間はどうでしょう。

やっぱり他の動物にはないものすごい能力があつて、ほとんど間違いのない判断力を持つているのです。でもそれを活かしているかどうかは疑問です。

酔っぱらいが自分の家にちゃんと帰ってくるのですから……まあそれは冗談として、人間はその精神活動が他の動物よりずっと複雑で難しくできているようなのです。

もちろんその一番大きな要素が「大脳のはたらき」であり、それに伴う「自分」という意識の難しさです。

それで、人間はいろいろ迷っているうちに困ったことになったり、失敗をしたりするのは

より大きなところで

#### 和田重正言葉抄

##### しあわせについて(一)

乳房に吸いついてい  
る赤ん坊、青空を流れる  
ちぎれ雲の白さに見  
入っている幼児、早春  
の陽だまりに咲くいぬ  
のふぐりの青さに気づ  
いた児童、自分の外に  
社会があり人類があつ  
て、それと自分の関  
わりに気づいた十四・  
十五才の年少青年。み  
んなそれぞれの時にそ  
れぞれのことに目覚め  
て、その人らしく生長  
してゆく。それが人の  
幸せというものだらう。  
空飛ぶ雲や雑草の花  
に見とれている子に数  
を教え、文字を憶えさ  
せようと焦る親心は何  
か重大な誤解をしてい  
る。世の中の事態に気  
づきかかって夢を描こ  
うとしている少年の肩  
を叩いて「ポンヤリシ

人間の頭はどう見ても、神様は途中まで設計してその先は「もう一つの進化」を課題として残したのではないかと思つてしまいます。だから人間には「教育」という妙な分野が必要になつていふのです。

「人がしあわせに生きる」というテーゼ(命題)にはどうしても「教育」の基本に「人間とは何だろう」「自分とはどういうものだろうか」という視点が必要です。まあそれは、仏教ではどう言つていふのだらう?キリスト教ではどう言つていふのだらう?といった「宗教観」が大いに役立つのだと思つた。

人間の価値選択がグラツクのは(政治屋がブレるのも同じ理由ですが…)価値基準が小さいからなのです。目先の損得に振りまわされて、正邪、善悪の基準までコロコロかわつてしまいます。

お父さんやお母さんの言うことが朝と晩とで違つていたのでは子どもは困つてしまいます。(いえ、変わった方がいいのです。価値選択の基準がグラツカなければ)

「より大きなところで判断してゆく」ということは、個別の成功、失敗より「方向」さえ

間違つていなければよいということですが。

その「方向」や「大きな価値基準」を「柱」とすれば、ブレたりグラツイたりしないですむのです。

#### 家庭・家族・生活の柱

ところで、「家庭」というのはいづれ解散していく可能性を持つていますが、「家族」というのはそのつながりは切つても切れませんと。だとすると、「家庭」という場は子ども

の自立を一つの目標としています。それはハッキリ認識しなければ、最近のような、なかなか自立できない子や自立できない夫ができてしまうのです。

「家庭」と「家族」の意味の差を使い分けて下さい。とすると、「家庭の柱」は、いづれ解散していくための「子育ての場」ですから、健康のことから学業のことからお金のことから近所づき合ひまで、すべてに優先順位を決めて、柔軟な適用をしていく必要があります。

「家族の柱」というと、親子、兄弟などの人の関係、力関係のバランスが大切なところで

ていると競争に負けるぞ」とケチな自我の中へ引き戻してくれる大人は幸せについて大きな誤解を持つていふに違いない。将来に備えることはよろしい。しかし土台を築かずに建築にとりかかるのは賢いやり方ではない。将来の幸せのために現在の生長を犠牲にするのは愚かなことだ

(昭和56年 くだがけ二十五号より)

す。個と全体の意味を柱とします。個がイキイキしていなければ全体の活性化はありえませんが、個の犠牲の上によい全体なんかないのです。ついでに言えば「個」というのは誰のことかということも家族でもう一度見直して

みる必要があります。「生活の柱」は一人一人「個々の」努力です。食とか性とか睡眠とか運動とかをバランスよくすることです。「生活の柱」は十四歳講座などでよく解説する「欲望」の理解が大切です。

#### 自己中心の度合い

「くだがけ」の四本柱として出しているのは「よい生活」「愛言葉かけ」「子どもと共にイキイキ」「真の教育」です。

どれも、相手のしあわせを願つての自分の努力の内容です。

あるお坊さんのお話に「もつとも純一な気持ちには己れの深く欲するところを大切にしながら行くときに、おのずから自他をひとしく利するとう境地です。こういう気持ちで進んで生活を洗練してゆく」とありました。

四本柱を建てて「家庭」や「家族」や「生活」の方向を決めて行きます。「自他をひとしく利する」というのは「自己中心の度合い」のことで、「自分が自分」と自分ばかりを前面に押し出して人のことは眼中にないのではしあわせは見えて来ません。

自分なんかどうだっていい、というわけにも行きませんが、結局、人間の精神活動の最も難しいところが、「大脳のはたらき」と「自分」というものの取り扱いなのです。

まあ、そういうものの「取り扱い説明書」がくだがけでやつている「人生科」や「同行教育」だと思つて下さい。

#### 一口メモ

台柱と土柱の対比

台柱は太く、土柱は細い。台柱は硬く、土柱は柔らかい。台柱は安定し、土柱は揺らぐ。台柱は基礎を固め、土柱は土を固める。

シッカリとした土台の上に、のびやかな土柱を立てる。それが人生の柱である。

